
八菱書房 パロディの星

八菱書房

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八菱書房 パロディの星

【Nコード】

N0641B

【作者名】

八菱書房

【あらすじ】

ちよっときもい兄のタツオと、兄を嫌う弟のリョウタ。リョウタは次第に兄を理解していくような、しないような。兄弟の心温まるような、心温まらないような。パロディもの。

01 ☆ 僕の家族を紹介します（前書き）

僕も先がよめません。

01☆：僕の家族を紹介します

「Hey! Ryota! (よっ! リョウタさん!)」

僕の布団をはぎ取ろうとする人物がいる。

―この声は・・・兄の婚約者のサラージャだな。

僕は必死に抵抗しつつ呟く。

「今日は日曜日だよ、タツオに会いたくないよ・・・」

「Wake up! breakfast is ready! (起きて! 朝食の準備が出来てるよ!)」

彼女は僕の布団をはがして言う。

仕方がない、僕の負けだ。

僕は二度寝を諦めて起きることにした。

「立て! 立つんだジョーっ!!! (早く起きて、リョウタさん)」
―立ちますよ!

彼女が日本語を学ぶテキストが悪かったのか、日本語教師が悪かったのか、やはり兄のタツオの暗躍なのか、そもそもジャパニメーション目的で日本に来たのかはわからないが少し変った日本語を使う。僕は寝ぼけながらも階段を降りていった。

朝の挨拶ともにリビングに入ると家族は父を除き全員席に着いていた。

ちなみにテーブルの中で一番テレビが見やすい位置に父は座り、次に兄、僕、母、サラージャという順番で座る。

朝一番で母が僕に注意する。

「リョウタ、もう少し早く起きなさい。毎週起こしてもらってるじゃないの」

「ああ、うん」

朝一番で兄が僕に絡んでくる。

「グッドモーニング娘。！」

「ああ、うん」

―お前は黙ってろ！

僕は家族を他人に紹介するのが恥ずかしい。

なにより兄の存在を誰にも知られたくない。

残念ながら中学の時は兄と同じ中学校だったために、僕は入学したときに三年生の視線を浴びて登校したのである。

―あれは辛かった。

なんて言ったって僕の中学校には、

「お前、タツオ」

という、最悪の褒め言葉があるのだ。

「タツオ」

は

「キモイ」

とか

「空気読め」

の代名詞といっても過言ではない。

今でも根強く残っていると聞く。

僕が席に着いて母に聞いた。

「父さんまだ帰ってきてないの」

「仕事が終わらなくて今日も帰らないで働くみたい」

父は家族を愛する立派な人である。

そしておそらく、父の座右の銘は

「過労死」

だ。

ここ最近、会っていない。

「父さん、このままじゃ死んじゃうんじゃない？」

と僕はパンを食べながら訴える。

「そうね・・・、でもまだローンが残ってるのよ・・・」
母は心配そうに呟いた。

「親父、ベランダで『翼をください』歌ってたよ」

タツオは本当に空気が読めない奴だ。

ある意味、こいつがいるから暗い話しが途中で途切れるのかもしれない。

実は言うとな父の職業を知らない。

タツオは知っているらしいが話してくれない。

どうやらタツオはこれから万屋^{よろずや}へ行くらしい。

この店は、無い物はないがモットーのジャンキーな店だ。

偶然にも家の近くにこの店はあるらしいのだ。

そして幼い頃の兄の人生を狂わせたのはこの店だ。

たまには兄が外で何をしているか観察するために一緒に出かけることにした。

01☆：僕の家族を紹介します（後書き）

次は万屋に行ってきます。

02☆::FIRST FANTASY (前書き)

ちよつと先が見えてきた。

02☆..FIRST FANTASY

〴日頃の兄の行動を観察するために、僕は兄とともに万屋へ向かう。

兄は三丁目のタバコ屋を曲がって細い路地へ入った。

兄曰く、サラ―シャとの出会いの場は万屋だったそうだ。

惚れ薬の効き目は抜群だと兄は語る。

僕も惚れ薬なら知っている。

サラ―シャも持っていた。

「リョウタ。誰にもつけられてないか？」

兄の真面目な顔を見るのは初めてだ。

そんなに重要な店なのだろうか、いやそんなはずはない。

そしてなにやらぼろアパートに入っていた。

―こんなところにあったのか。

僕もアパートに入ると、部屋は真っ暗だった。

「ドアを閉めろ」

兄の鋭い声がする。

僕は慌てて閉めると

不自然なほど明るい照明が僕らを照らす。

「タツオ！ここどこだよ」

僕は辺りを見回しながら訪ねる。

両端は真っ白い壁に囲まれている。

正面には鋼色の巨大な扉があり、宇宙人に会えるのではないかと思わせる。

タツオは部屋の奥で何かを操作している。

「もはや、これを知っているものは少ない・・・」

「上・・・X・・・下・・・B・・・L、Y、R、A・・・こっこれは！」

「カカロットオ」

と声がしたと思ったら、扉が開き始める。

扉が開き、僕らは廊下を歩き続ける。

そして再びドアが現れる。

このドアは簡単に開くようだ。

「どうだ近かっただろう」

兄は自慢げに笑いかけてきた。

「いらっしやい。タツオがそっちのドアから入ってくるのは久しぶりだの。」

店番をしている初老の男と兄は知り合いのようだ。

「店長はいないの？」

と兄は常連であることを匂わす。

「店長は悪魔の実を買い付けに行っておるよ」

とそんな会話をしている二人の後ろで僕は商品を眺めていた。

キノコ王国通貨、1000円

―100枚でマリオ人形プレゼント！

飛空石（小）、10万円。

―ちよつと欲しい！

眠都、200万円。

―なにやってんだハマー！

やばい興奮してしまった。

また明日来てしまいそうだ。

「タツオ、おれもう帰るよ・・・」

興奮していることを兄に悟られないように僕は呟く。こいつと同じ人間だと思われたくないからな！

「そうか。あと本来の出入口はそっちだから」

と言って正面の自動ドアを指差す。

僕は黙って万屋を出ていった。

「またのお越しを」

万屋から一歩踏み出すと、僕は駅前の喧騒の中にいた。

―駅前かよ！

02☆..FIRST FANTASY(後書き)

明日も万屋に行きます。

03☆::BACK TO the YOROZUYA (前書き)

1日1話のペースでいきたい。

03☆..BACK To the YOROZUYA

僕は迂闊にも万屋の楽しさを知ってしまった。

月曜日の学校帰り。

僕は再び万屋の前にいた。

店の前には新鮮なフルーツが並び、とてもあのアングラなイメージの店ではない。

「おお弟さんか！」

昨日店番をしていた初老の男が店の前で躊躇する僕を見つけて呼び掛けた。

「入荷したてのフルーツなんだけど食べるかの？」

と言って試食用に小さく切られた果肉を楊子に刺して僕に渡した。

「何のフルーツですか？」

僕はそれを口に運びながら聞いた。

赤い色をしていて、一見スイカのようなだが。

「ブタブタの実じゃよ。十数年前に食べさせた奴は優秀な戦闘機乗りの賞金稼ぎになりおったわ」

「あっ危ねえ！」

僕はあわや口に入るブタブタの実を寸前で止めて男に返した。

「いらぬのか。残念だ」

「何が残念だ！」

男はその果肉を道に放り棄てた。

すると駅前をうろついている野良犬が走ってきて、さっと拾った。そしてその野良豚はこちらをちらりと見て、のしのしと走っていった。

「謀ったな！ 謀ったな！」

店に入り商品を眺める。

店の隅に大きめの段ボールが置いてあるのが見えた。

「農薬未使用、安心、安全、悪魔の実」

と書かれた段ボールだ。

僕は今日も商品を眺めた

タケコプター、1万円

―どう見ても、ただの白い粉だ

フェニクスの尾、募金制

―恵まれない瀕死の子の医療費になります

モンスターボール、200円

―決して人には投げないでください

僕は気付いてしまった。

万屋にいるだけでなんか楽しい。

やはり兄と僕は血が繋がっているのか・・・。

タチコマという戦車のカタログを眺めていたら、辺りが騒がしくなってきた。

店の前でフルーツを売っていた初老の男が必死に抵抗しているらしい怒号が聞こえる。

僕は嫌な予感がしたのでどこか隠れる場所を探した。

あそこだ！

僕は素早い身のこなしで隠れた。

すると黒い覆面の男が万屋に入ってきた。

僕は今、段ボールの中にいる。

大きな声では言えないが、隣に誰かいるんだけど。

「こちらスネーク。潜入に成功した」

「タツオだー！タツオがいるー！」

僕は小声で話し掛けた。

「タツオ！何やってんだよっ」

「AKにグレネードか・・・」

「話し聞けよこの野郎！」

「リョウタがこの店に来たと聞いてな、写真に収めようとしたらこの展開だ」

「店先にいた男だな！ちくりやがって！」

覆面の男は何をするわけでもなくうろろしている。

どこからともなく音がした。

授業中にならしたら大変なことになる、あれだ。

「！？」

「お兄ちゃん、オナラしちゃった？」

「そっそれよりどうすんだよ」

と僕は小声で訴える。

僕はとにかく家に帰りたい。

「雑誌を置いてそのうちに逃げる」

とタツオは黒い覆面の男を見ながら言った。

大丈夫なのか・・・。

タツオは雑誌を覆面の足元に投げた。

「！！」

予定どおり覆面の男は気が付いた。

「うわ！ジャンプじゃん！今週のテニプリどうなっちゃってるんだろー！」

僕らはその隙に逃げた。

03☆::BACK TO the YOROZUYA (後書き)

今後の参考にしたいのでコメントを頂けると嬉しいです。

04 ☆ 既知との遭遇（前書き）

全12話くらいにしようかと思う。

04 ☆：既知との遭遇

「万屋からなんとか逃げ出した僕。しばらく万屋から遠ざかることにした。」

僕の家の最寄り駅周辺はそこそこ栄えていて、若者が遊ぶ分には何の差し支えもない。

僕は中学から付き合いのあるユウヤとゲームセンターに来ていた。

「リョウタ！格ゲーやろうぜ、格ゲー」

ユウヤの提案に僕は少し顔をしかめた。

「えー、格ゲー？」

僕はあまり格ゲーが好きじゃない。

兄が強くて勝てなかったからだ。

実際、エドモンド・本田が飛んでいくやつしかやったことない。

「やったことないのか？格闘ゲーム」

とユウヤは僕の肩を叩きながらケラケラ笑っている。

「やったことくらいあるさ！」

僕は少しムキになって火を吹く真似をした。

「誰の真似だよそれ！」

とユウヤはやはりケラケラ笑っている。

他の客の視線が僕のハートに刺さった。

「そういえばさ、駅前でおもしろい店見つけたんだよ」
ユウヤは屈託のない笑顔で話す。

「へえ、どんな店？」

と僕もつられて笑顔になる。

―こいつは雰囲気明るくする奴だよなあ。タツオとは大違いだ。

「何か『タツオ』な商品売ってる店なんだよ」

―え？

「そっそうなんだ・・・」

―まさかな、僕の勘違いさ。

「なんかオッサンが店先でフルーツ売ってんだぜ？」

―なんだ八百屋か、八百屋。

「オッサンが海賊王にならないか、とか聞いてくんだぜ？笑っちゃうよなあ」

―あーあー！聞こえない！そうだ年号を思い出そう！

「何の店か気になっちゃってさー！」

次第に話に熱が入ってくるユウヤ。

できればこの話は止めたいんですけど。

「『タツオ』な店に入るところ見られたらやばいじゃん？だから黒い覆面被って入ったんだよねー！」

―1192つくろう鎌倉幕府！1192つくろう鎌倉幕府！

僕の心拍数はうなぎ登りに上昇中だ。

冷静になるために年号が一番だよな。

「今から一緒に行こうぜ」

―794ウグイス、平安京！794ウグイス、平安京！

「こっちだよ、こっち」

―710ねばねば平城京！710ねばねば平城京！

「ここだよ、リョウタとならギャグで通用するよ。入ろうぜ」

僕はいつの間にか万屋の前に立っていた。

―だが断る。この八菱涼太が最も好きなことの一つは、間違ったこ

とをしようとしてるやつにNO、と断ってやることだ・・・。

その時、万屋のドアが開く。

「Hey, Ryota! What are you doing?
(あら、リョウタさん。何してるの?)」

―まっまずい、サラ―シャだ!

そしてユウヤがうろたえる。

「やべえ俺、英語わからねーよ」

僕は何とかこの場を切り抜けて家路へと向かった。

「さっきの外人何て言ってたんだ?」

とユウヤが聞いてきた。

「駅に行くにはどうやって行くのか聞いてたよ」

と冷や汗をかきながら、何とか苦し紛れの言い訳をする。

「へええ! リョウタってすごい奴だな!」

―英語できない奴でよかった。

僕は安堵しつつも動揺を悟られないように真っ直ぐ前を見て歩く。

「でも駅って目の前だけだな」

と眩しいくらいの笑顔で笑うユウヤに、僕はドキドキした。

いや、恋とかじゃなくて

04 ☆ 既知との遭遇（後書き）

読んでくれてありがとうがとアロエリーマン

05☆私上最大の作戦（前書き）

コメディパートとストーリーパートに別れるかも。

05☆：私上最大の作戦

「万屋にはしばらく行かないよ。取り込まれてしまいそうだから・・・。」

「なあタツオ。今度、友達とキャンプに行くんだよ。でさ・・・、タツオも来てくれない？」

「マイブラザーがミーに頼み事とは珍しいな、無問題さ」
こうなってしまったのはわけがあるんだ・・・。」

話は数時間前へさかのぼる。

学校で仲間が何やら盛り上がった話をしている。

「ねえ、何の話？」

僕は話に割って入った。

「今度の休みにどこかにキャンプにいかうと思うんだ」
この話の提案者らしいカズヤが教えてくれた。

「へええ！いいね！」

「キャンプかあ、行ってみたかったんだよね。」

「そこでリョウタくん。君には大役を与えようと思うのだ」
カズヤがかしこまって言った。

「なんでありましょうか、閣下」

僕はカズヤに合わせてかしこまって聞いた。
周りにいる男どもの視線が僕に集まる。

「・・・君には女の子の勧誘を頼みたい。やってくれるな」
カズヤは僕の腕を持ち、目を見て真剣な目で言う。
周りの男どもも真剣だ。

「え、僕ですか？」

「え、僕ですか？」

僕は男どもの期待を背に、女子の集まる席へ向かう。

「あのー・・・、僕達とキャンプに行きませんか？楽しいですよ」
少し棒読みになってしまったが仕方あるまい。
これ以上期待されても困る。

「いいよー！」

「こいつぁ驚いたぜ！」

彼女達は僕らのやりとりを聞いていたようだ。
声がでかかったしな。

しかし彼女は想定外の条件を付けてきた。

「八菱くんってお兄さんいるんでしょ？」

「こいつぁ驚いたぜ！」

「ええ、まあ、うん、そうだね、いるかいなかった言ったら・・・
いるほうかなあ」

「えーっ？見たいよねー」

と女の子の中で中心的役割をしている中村さんが周りの女子に同意を求める。

「うん、見たい！見たい！」

「あっ悪夢だ・・・」

リョウタはめのまえがまっくらになった。

と言うわけだ。

幸運なことに彼女達は兄を知らないようだった。
兄にしっかり釘を刺しておけば大丈夫・・・だ。

05☆私上最大の作戦（後書き）

ストーリーパートはシリアスな展開になるかも。

06 ☆..タツオに首ったけ(前書き)

さあ、6☆目が開幕です。

06 ☆…タツオに首ったけ

青春、それは、ふれあいの心。

「リョウタくん、本計画の要点を発表せよ」

カズヤの指揮のもと、我々は決死の戦いに挑む。

男の・・・、一世一代の・・・、大勝負だ。

「はっ、我々は野流満泥キャンプ場に上陸し、テントを設営します」

「ここが腕の見せ所だな・・・」

これを聞いた男たちの目の色が変わり、唸るように呟いた。

「はい、ここで水汲み、薪の調達、調理の準備をうまくできるかどうか・・・、各自の今後に影響すると思われます！」

「よろしい、そして皆が気になる日にちだが。」

僕に代わりカズヤが説明を始めた。

皆、息を呑む。

「D・Dayは来月の6日だ。心しておけ」

作戦会議はおわり、僕らは解散した。

某月6日・・・、ついにこの日が来た。

男どものメンバーは、リョウタ、カズヤ、タツオ、男子生徒A、男子生徒Bだ。

一方女子のメンバーは、中村さん、女子生徒A、女子生徒B、女子生徒C、風谷さんだ。

風谷さんは人数調節のための補充要員である。

また風谷さんのスペックは未知数である、期待はしていない。

僕らは無事キャンプ場に到着し、自己紹介を始めた。・・・女子生徒達と男子生徒達の紹介が始まる。

【省略】

終わる。

そして中村さんの自己紹介だ。

「さすがは我らのクラスを代表する美少女だ。格が違うぜ・・・」
カズヤはうっとり見つめている。

「見すぎー！見すぎだよ！次はアンノーウンの風谷さんだ。」

「これは予想GUYだぜ！美しい！

「その者青き衣をまといて金色の野に降りたつべし・・・！」

「あれ、こいつも？」

こんなこんなで僕達の戦争は始まった。

僕は、残念ながら地味な水汲み。

縁の下の力持ちの自己犠牲の格好よさのモテっぷりを・・・。

一方、カズヤは自慢の料理を奮っているようだ。

悔しいが様になっている。

そういえばずっと触れていなかったがタツオは何をしているのだろう。

僕は辺りをキョロキョロ見渡す。

「いた！」

タツオは女の子全員に囲まれて、楽しくおしゃべりと洒落こんでいる。

「I hate YOU! (タツオが憎い!)

「I loved YOU! (愛したのに!)

「お兄さんって名前何ていうんですかー？」
「ボOND。ジェームズ・ボOND」

料理が出来てきました。

タツオは始終座っていた。

タツオはアメリカの騎兵隊がかぶる帽子とサングラスをかけてこう
呟いた。

「この匂いは他にない。朝のナパームは格別だ
」

「誰のコスプレだよ。」

あんなこんなでキャンプは終わった。

「タツオさんて面白い人だねー」

と女子たちは口を揃えて言う。

「マジで？」

意外なことにタツオは好印象だった。

「じゃあ、僕もタツオを見習って・・・。」

「あいつはとんでもないものを盗ん・・・。」

「でも彼氏にはしたくないよねー」

「うん、無理だよー」

「ですよー」。

06 ☆..タツオに首ったけ（後書き）

ありがとうございました。

07 ☆ オタク世紀少年（前書き）

さて、どう転ぶか。

07 ☆ オタク世紀少年

「キャンプから帰ってきた僕。少し兄のことが理解できた。バカつてことを。」

今日は兄と出かけます。

兄がついてこいということです。

さて何の用があるのでしょいか。

「リョウタ、見てみろよ」

タツオはある店を指差して言った。

「あれ・・・？万屋じゃん」

驚いたことに、外見は少し違えど看板は万屋とあった。

「行くぞ」

タツオは中に入らず行ってしまった。

僕は意味もわからずついていく。

そして歩いて数十分。

タツオは黙って指差した。

「あれ！ここにも万屋？」

なんとそこにも万屋があった。

「驚いたなあ。」

「いかん！」

「どっとうしたんだ！」

「妹分が不足してきた！」

「いもうとぶん？」

「そうだ妹分だ！」

「それは糖分とか塩分みたいなものか？」

「その通りだ。外気に触れると減ってくる。妹分が足りなくなると、頭痛、めまい、吐き気、呼吸困難ひどい時には失明等の症状が表れる」

「妹分は・・・、妹に含まれているのか？」

「はっはっはっ早く！息が苦しい！」

「おっお兄ちゃん！」

「ふはっ！危ないところだった・・・。今の声はとてもグッドだったぞ」

「やっぱキンモー・・・。」

「最近なかなか摂取できなくなてな・・・。妹分欠乏症だ」
「そろそろ病院に連れていこうかしら。」

とにかく、万屋は全国チェーンとなっているらしい。

「数年前から全国展開していたらしい。俺はニートだったばかりに数ヵ月前まで気付かなかった」

「やっぱニートか！」

「すごいじゃん、万屋」

「ああ、その人気は凄まじい」

「やっぱり皆、はまっちゃうんだ？」

僕は笑いながら言ったが、兄は真剣な目でこう言った。

「ああ、皆、はまっている。一大ムーブメントだ。つい最近与党になって政権を握った万民党は万屋の政治結社だ」

「こいつ誇大妄想狂か？」

「もう誰にも万屋を止められなくなる？早く止めっ・・・」
「どうした！」

「妹分が不足してきた！」

「お兄ちゃん、もう森に帰ろうよ！」

タツオは苦しそうに呻きながら言う。

「ああ、すまない。ここは濃度が濃すぎる。肺が焼けるようだ……」

「マジでやってるのか……？」

「このマスクをすれば苦しまなくて済むらしいのだが……」

タツオは顔全体を覆う白いガスマスクのような物を取り出し言った。

「何でつけないんだ？」

「これをつけたら負けかなっと思ってる」

「いっそ死んでしまえ！」

「……帰るか」

「ああ、また発作が起きたら面倒だからね」

こうして僕らは家路に向かう。

07 ☆ オタク世紀少年（後書き）

これでよかったのだろうか。

08☆：兄猫は眠らない（前書き）

パロディがテーマです。

08 ☆ 兄猫は眠らない

「僕は苦しがるタツオを引きつれて家に帰る。」

リビングに入ると、母は電気を消して、部屋を真っ暗にして椅子に座っていた。

「タツオ、リョウタ・・・お帰りなさい。」

僕は電気をつけて、恐る恐る母に尋ねる。

「どうしたの？」

母の目は充血していて涙を堪えているようだった。

「お父さん、もう会えないかもしれない・・・」

「え？」

さすがのタツオもいつものようなことは言えないようだ。

いや、タツオのことだから全部知っているのかもしれない。

母はそう言って寝てしまった。

僕は悲しそうな目をした母に尋ねることは出来なかった。

「最近、駅前の万屋に行っていないでしょ・・・？」

僕はタツオに唐突に尋ねた。

特に明確な理由があるわけではないが、なんとなくそう思った。

「まあな、リョウタと行って以来・・・行っていない・・・」

「なんで？昔は毎日のように行ってたんでしょ？」

タツオに何かあったのだろうか。

かなりの常連のようだったが。

「明日・・・、駅前の万屋に行くか・・・」

タツオは何を考えているのだろう。

能天気な奴だと思っていたが・・・、何か思うところがあるらしい。

「うん・・・」

僕はただ頷くしかなかった。

「明日・・・、母さんが言っただことの意味がわかるかもしれない」

「今教えてくれよ!」

僕は少し声を荒げた。

いつもそうだ。

いつもそうなんだ。

いつも僕は知らない。

いつも僕は知らないんだ。

「いや、わかったところで手遅れだな」

― 一体なんなんだ、万屋・・・？

僕は考えた。

だが考えるだけ無駄であろう。

「考えるな、感じるんだ」

タツオは虚しく笑った。

僕はそのまま自分の部屋に入り、寝た。

いつもより少し早く起きたようだ。

タツオの部屋に行く。

タツオはすでに起きていた。

― 珍しい。

僕らは例のボロアパートへ向かう。

「2☆でここ通ったの覚えてるか？」

「2☆ってなんだよ、2☆って！」

「え？ ああー、うん。覚えてる」

アパートの中に入り、タツオはドアの操作パネルに入力する。

「カカロットオ・・・」

とドアのキーが解除されたことを告げる音声が響く。

心なしか淋しく聞こえた。

僕らは万屋へと向かって歩きだした。

08 ☆：兄猫は眠らない（後書き）

そろそろ完結か！？

09 ☆..**オタク帝国の逆襲**(前書き)

コメデイか？これは。

09 ☆ オタク帝国の逆襲

く兄とともに万屋へ行く僕らに。万屋で何が起きているのか。

万屋にやってきた。

前来たのはいつだろう。

部屋には全身真っ白で、フルフェイスの、タツオが持っていたマスクと同じものを着けた人が何人もが整列していた。

狭い部屋にだ。

まるでSFに出てくる近未来の兵士のようなだ。

「おやおや、こちらから伺おうと思っていたところだよ。タツオくん。それにリョウタくん」

と初老の男が言う。

「店長に会わせてもらいたい」

タツオは相手の顔を見ずに答えた。

「店長も君たちに会いたがっていたよ」

―君たち？

「だがタツオくん、君は自分の立場をわかっていないのかな？ 連れていけ」

たちまちタツオは周りの兵士たちに連れていかれた。

しばらくすると奥の部屋から、全身真っ黒の、黒いフルフェイスのマスクをした人物が出てきた。

マントをなびかせて登場したこの人物は、いかにもボスと言った具合だ。

「彼が店長・・・、いや、ジャアイアン卿だ」

僕は何となく理解した。

こいつは父のことと深く関係がある、と。

「父さんを、テツロウを返してくれ！」

僕は怯むことなく相手に詰め寄った。

相手の表情はマスクで見ることが出来ない。

「おまえの父はもういない」

ジャアイアン卿は淡々といった。

ーっ！

僕は絶句してしまふ。

こんなにはつきりと言われてしまつては。

「嘘をつくな！」

もはや僕はただ疑うことしか出来まい。

これ以上話すことはないと思い、僕は入り口から出ていった。

「追いますか？」

「いやいい。監視だけしておけ。私が自ら会いにいく」

その日、タツオは帰ってこなかった。

この国に何が起こっているのか。

気付いた時にはもう遅い。

そんな言葉が頭をよぎる。

政治の実権は万民党が握った。

万民党独裁は、国家元首の皇帝を万屋社長の方・久部^{マン・クベ}として新国家樹立の宣言をした。

僕の国は消滅し、新たに万帝国よろずていこくが誕生したのだ。

少しばかり万帝国の説明をする。

基本的には身分社会である。

オタクと呼ばれる人たちに権力が集中する世界だ。

僕はこのくそつたれな帝国を打ち倒すために闘うことにした。

万屋、万・久部の支配から解放されるために。

僕は闘う。

兄を救うため、父を救うために。

町には真っ白の鎧をきた兵士たちが歩き回り、帝国に批判的なものは逮捕されるようになり、僕らに自由はなくなった。

09 ☆..**オタク帝国の逆襲**（後書き）

パロディか？これは。

10☆::Never Catch Me If You Can(前書き)

もうすぐ終わるから、責めないで。

10☆::Never Catch Me If You Can

ゝ家に忍び寄るなぞの影。

「自宅か、何もかも皆懐かしい」
夜、家の前に立つ影があった。
暗さのためシルエットしか見ることが出来ないが、その人影の人物はマスクをしているようだった。

僕は外に出た。

コンビニに夕ご飯を買いにしようと思ったからだ。

24（トゥエンティーフォー）というコンビニにやってきた僕は、ミートソースポロニア風というスパゲティを買い、温めてもらってからコンビニを出た。
スパゲティが冷めるまであと24分。

「あざーしたー」

と店員の声を背中に受けてコンビニを出る。

するとコンビニの外に誰かが立っていた。

真っ黒の鎧を着た、ジャアイアン卿がそこに立っていた。

ーやばい！

僕は走って逃げた。

道の先には真っ白の鎧の兵隊が立って検問をしている。

僕は兵隊がいる道を避けて走った。

今日に限っていたるところに兵士はいる。

—ここにもいる！

僕は気が付いたときには空き地に追い込まれていた。

土管が数本並んでいるだけの空き地だ。

土管に入ったら別の土管から出てこられると思って試したが無駄だった。

「おまえを危険な存在だと皇帝が言っている」

ジャアイアン卿はゆっくりと近づいてきた。

そして腰に差していた棒、いや刀のようなものを抜き、構えた。

僕に武器はない。

—もうおしまい！

その時、頭のなかにタツオの声が響いた。

「リョウタ。フォースを使い」

—ありがとう、タツオ！

その時、ジャアイアン卿の刀が振り下ろされる。

僕はスパゲティの入った袋からフォークを取り出して間一髪でそれを受けとめた。

「これが噂に聞く蟲の皮のフォークとはこれか」

ジャアイアン卿は少し間合いをとって言った。

僕はフォークでジャアイアン卿の刀を受けとめていく。
しかし防戦一方だった。

次第に追い詰められていく。

「なぜ降伏しない」

ジャアイアン卿は僕に問い掛けた。

「くそっ！」

「お前は父さんを殺した！」

「違う！」

僕のフォークは弾かれて、僕は絶体絶命のピンチとなった。

僕は剣を向けられ、身動きがとれない。

ジャアイアン卿はマスクで籠もった声で言う。

「私はお前の父だ！」

「嘘だ！」

夜の街に僕の声が響いた。

「私と共に皇帝を倒そう。そしてリョウタよ、あの栄光の星を目指そう！万の星だ！」

ジャアイアン卿は光り輝く星を指差していった。

僕はいつのまにか集まっていた兵士達に拘束され、連れていかれた。

空き地に置き去りにされた、スパゲティはすっかり冷めていた。

10☆::Never Catch Me If You Can(後書き)

始めからこんな話を作る気だったんだろうか・・・？

11☆..大逃走(前書き)

12☆で終わらないみたい

11☆…大逃走

く牢屋にぶち込まれた僕。

僕は目を覚ました。

「リョウタよ。死んでしまうとは情けない」

―誰かと隣にいる！

「僕は死んだのか？」

隣にはタツオがいた。

「お前……。最近素直だな」

「タツオか。逃げられたのか」

僕はタツオに聞いた。

タツオは答えた。

「タツオは逃げ出した……。ダメでした」

それはそうだ。

同じ牢屋の中にいるんだから。

僕は辺りを見回した。

牢屋の壁はレンガで、少しじめじめした感じの部屋だ。

「だが、今度は大丈夫だ。トンネルを掘った」

タツオは笑いながら指を三本立てた。

―すごいよタツオさん！

タツオは自慢げに顔を上げて言う。

「三本掘ったんだ」

「トンネルを掘って脱出する映画を知ってるか？」

タツオは僕に尋ねる。

タツオは映画にもアニメにも漫画にも強そうな人間だ。

「さあ、どうゆう映画なの？」

「知らないのか。トンネルを三本掘って収容所から脱走を企てるんだ。ノンフィクションだ」

タツオは呆れた顔で説明した。

「で、彼らは逃げられるのか」

「映画の結末を言うほど野暮じゃない」

タツオはトンネルの穴を指差しながら続けて言う。

「ロイド・トンネル」

「アナ・トンネル」

「デディ・トンネル」

どれもうまく隠されていてわからなかった。

「アナ・トンネルは水道管にぶち当たったから未開通だ。ロイド・トンネルは隣の牢屋につながっている」

タツオは隣の牢屋にいて、たまたまりヨウタがこの部屋に連れてこられたらしい。

「じゃあデディ・トンネルは？」

僕が期待をしつつ尋ねると、

「あとは逃げるだけだ」

とタツオはいつものように笑って答えた。

「名前の由来のデディは確かゲームの途中で死ぬけどな――
縁起悪っ！」

「あれ、死ななかったか・・・？」

「そんなことより早く逃げよう！」

僕はタツオを急かした。

タツオは黙ってトンネルの中に入っていった。

「トンネルの先が安全か確認してくるから待ってろよ」

その時、足音が響く音を僕は聞いた。

「タツオ！急げ！」

タツオはなかなか戻ってこない。

僕は背中に冷たい嫌な汗を感じた。

心臓がトクントクンと打つ音が聞こえる。

―早く早く早く・・・。

「大丈夫だ！」

トンネルの中からタツオの声が漏れてきた。

「リョウタ。皇帝がお待ちだ」

僕は後ろを振り向いた。

そこにはジャアイアン卿の、父テツロウの姿があった。

「手荒な真似はしたくない」

タツオはうまく逃げたのだろうか。

タツオならうまくやれるはずだ。

そう僕は願いながらジャアイアン卿に連れられて万屋の本社へ向かう。

巧妙に隠されていた穴は、堂々とそこに残されていた。

11☆..大逃走（後書き）

読んでくれてありがとう

12☆：王の間によろこそ！（前書き）

そろそろ完結します。ここまで読んで頂き光栄です。

12☆：王の間にようこそ！

「僕は皇帝の元へ連れていかれる。」

「父さんにはまだ善の心が残っているはずだ。皇帝を倒して父さんを救う！」

「言っただけだ。お前の父はもういない。・・・そして、皇帝には勝てない・・・」

僕とジャアイアン卿は皇帝のいる王座に向かって歩いている。

赤い絨毯の上を歩く。

十数メートル先の大きな扉の先に、皇帝はいるのだろう。

「この先に皇帝がいる。失礼なことをするな」

ドアが開いた。

とても広い部屋だ。

上を見上げると天井が見えないほどの高さである。

向かいにでかいスクリーンがある。

部屋の奥に椅子があり、誰か座っていた。

椅子は向こう側をむいていて誰が座っているのかわからない。だが恐らく皇帝が座っているのだろう。

「やっと会えましたね。リョウタくん。私は万・久部だ」

椅子がこちら側を向いた。
そこには万・久部の姿があった。

「私の部下になれば世界の半分をやろう」
「世界の半分!？」

「君のお父さんは快く承諾したよ」
「父さんが？」

僕はジャアイアン卿の顔を見た。
マスクの中の顔は何を考えているのだろう。

「ふざけるな!」
僕は不快だという表情をして睨み付けた。

「さて『はい』か『いいえ』しか答えはないはずだが・・・」
万・久部は怪訝そうな顔をした。

「父は世界の半分を持っていて、さらに僕にもう半分くれるっていうのか! そんなの・・・、いたせりつくせりじゃないか!」
突然万・久部の表情が変わった。

「え? あっ!・・・私は頭の良いガキは嫌いだよ!」

万・久部はスクリーンの方へ目をやり、スクリーンに映像を映した。
「これを見ても考えは変わらないのかね。君たちの仲間が戦っているぞ」

「これは一体・・・？」

スクリーンには小さな点がたくさん動いている映像が映っていた。
恐らく、この点の一つ一つは人間なのだろう。

「皆、君を助けに来た人たちだ。タツオくんもいるのかな」

万・久部は僕の方を向き直して言った。

「彼らが助かるかは君次第だ。リョウタクン」

「くそっ！卑怯だぞ！」

僕は拳を固めて唸った。

「そうだ、怒れ。私を倒してみろ」

万・久部は縦笛を僕の足元に放り投げた。

「こんなもので・・・！」

僕はそれを拾った。

そして呟いた。

「武器が戦力の決定的差でないことを見せてやる！」

僕は皇帝に縦笛で切り付けようとした。

しかしジャアイアン卿に阻まれて、縦笛と剣が重なる。

「邪魔をするなあ！」

僕は自然とジャアイアン卿と対峙する形になった。

「そおい！」

僕は縦笛でジャアイアン卿に切り付ける。

「そい！そい！そおい！」

縦笛と剣はぶつかり合い火花が散る。

万・久部は椅子に深々と座り見物している。

「素晴らしい・・・」

老いて傷ついた獅子は若く強い獅子に敗れようとしていた。

ついにジャアイアン卿は剣を落とされ、負けを悟った。

「さあ、とどめをさせ」

万・久部の無機質な声が部屋に響く。

ジャアイアン卿は僕の前にひざまづき息を荒そうにしている。

―僕の勝ちだ。

僕はジャアイアン卿の前に立った。

父の背中はこのなにも小さかったのだろうか。

僕は縦笛を向けて言った。

「お前の負けだ万・久部！」

「バカめ！服従しないのなら死あるのみ。服従しろ」

ついに万・久部は立ち上がった。

「リョウタ！助けに来たぞ！」

タツオが天井の見えない闇からロープを使い降りてきた。

「タツオ！」

なんと心強い援軍だろうか。

「タツオと二人で話がしたい！」

万・久部なら聞き入れてくれるはずだ。

「3分だけ待ってやる！」

―ほら！

「みんなを侵していたオタク胞子の散布は止めさせてもらった！奴は一人だ！」

タツオは僕に耳打ちした。
そして僕を見て言った。

「俺たちは負けはしない。秘密道具を持ってきた」

タツオは手を高く掲げた。

その時、

「さて、答えを聞こう！」

万・久部はこちらに向かって叫んだ。

12☆：王の間にようこそ！（後書き）

このサイトの住人とは作風が180。くらい違うな、とひしひしと
感じる今日この頃。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0641b/>

八菱書房 パロディの星

2010年10月10日01時10分発行